

浮世絵と絵図と地図と

描かれた藤沢の江戸から近代まで

2025年9月23日(火/祝)～11月3日(月/祝)

「カタ」と呼ばれていた？

～絵図、地図の歴史～

絵図や地図の歴史は古く、

日本において文献に初めて登場するのは「日本書記」です。

当時の地図は「図」と書き、

「カタ」と読まれていました。

大化の改新(六四五)後、新しい国造りのため、孝徳天皇

は日本各地にある田地の管理

をめざし、「図」の作製を命

じています。測量技術を当時

の中国から導入し、「図」の

作製を行う役人は「算師」と

呼ばれ、「図」の作製だけで

はなく、土木設計や税の徴収

などの役割も担っていました。

「図」は田畑の数や領地の詳細

といった情報を簡略的に記した

ものが多くみられます。

藤沢市
藤澤浮世絵館
2025年
10月
WEB版

浮世絵館だより



図1 遠近道印・菱川師宣「東海道分間絵図」一部抜粋

やがて「図」は「ズ」と読まれるようになり、地形や建物、木々が絵画的に描かれると、次第に「絵図」と呼ばれるようになります。

図1は、旅行案内絵図として作製された「東海道分間絵図」です。作者は遠近道印、絵は菱川師宣によるもので、道印が天和年間(一六八一～一六八四)に加賀藩前田家に献上した「東海道絵図」を基に作られています。

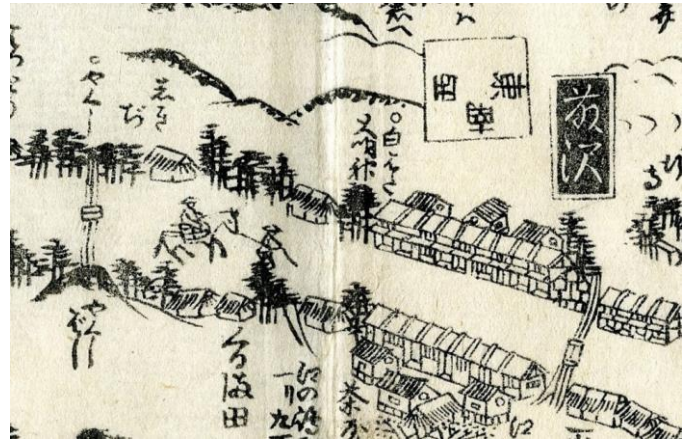


図2 遠近道印・菱川師宣「東海道分間絵図」藤沢宿部分を拡大

この「東海道分間絵図」では、各地の名所、沿道の茶屋などが絵画的に表現されています。江戸時代中期頃から庶民の間にも旅が広がり、このような絵図が量産されていきました。単に土地の詳細や正確な距離などを示すだけでなく、旅人の姿や各地で暮らす人々の様子などを描いたことで、当時の大衆に受け入れられたと考えられます。

北斎もまねた? 蕙斎の鳥瞰図

江戸時代後期になると、さまざまな絵師が現実感のある絵図に取り組みました。その一人に鋤形蕙斎くわがたけいさいがいます。図3は蕙斎が描いた「日本名所の絵」です。右上から弓なりに北海道(部分)、本州、四国、九州と続き、画中奥にある朝鮮へと続きます。



図3 鋤形蕙斎「日本名所の絵」

蕙斎は、これまでの鳥瞰図に、西洋の透視図法を用いて遠近感を出した浮絵の技法を取り入れ、俯瞰式風景版画を創り出したといわれています。ただ俯瞰しただけでなく、奥行きを持たせることで、実際に上空から見下ろしたようなリアルさを感じさせる構図です。

図4は、相模の地域を拡大したものです。「バニユウ」(平塚市馬入)、「小田ハラ」(小田原)などの地名に加え、江の島と思われる島も描かれています。



図4 鋤形蕙斎「日本名所の絵」相模の部分拡大

蕙斎は、幼少の頃から絵の才能を認められ、浮世絵師、北尾重政きたおしげまさの門下となります。重政から政美まさよしの名をもらい、版本の挿絵や武者絵、浮絵、鳥瞰図などを描きました。三十一歳の時、現在の岡山県である津山藩松平家のお抱え絵師となり、名前を「鋤形蕙斎紹真くわがたけいさいしゅうま」と称しました。この頃から狩野惟信かのうこれのぶのもとで狩野派の絵を学び、藩に關わる絵図作製など、活動は多岐に渡りました。「日本名所の絵」にみられる構図は、さまざまな絵を描いてきた蕙斎ならではのともいえます。描かれた当時はめずらしいとされたのか、葛飾北斎も取り入れ、「東海道名所一覽」などの風景・名所絵に応用したといわれています。

歌川貞秀の鳥瞰図

図5は、通称「御上洛東海道」と呼ばれるシリーズで、複数の版元と絵師たちによって作られました。その絵師の一人である歌川貞秀が、十四代將軍徳川家茂の上洛する様子を描いたものです。一行は現在の遊行寺坂を下って、遊行寺の前を通り過ぎ、大鋸橋(現 遊行寺橋)を渡っています。この絵の特徴は、高い所から見下ろした構図で描かれているところです。歌川貞秀は、歌川国貞の門下で、「五雲亭貞秀」や「橋本玉蘭斎」とも称し、幕末から明治初期に活躍しました。鳥瞰図を描くことを得意とし、測量や地理学に長けていた蘭学者と共同で関東の国絵図も作製しています。貞秀が鳥瞰図を得意とした背景には、富士山を登頂した経験が大きいとされています。



図5 歌川貞秀
「東海道名所之内 ふぢさハ 遊行寺」



図6 歌川貞秀「相模国大隅群大山寺雨降神社真景」

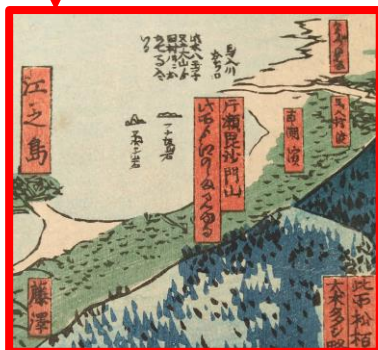


図7 歌川貞秀
「相模国大隅群大山寺雨降神社真景」
一部抜粋

実際に見た景色を基に、さまざまな鳥瞰図や、町や名所を一望できる一覽図などを描きました。それらの絵の中に、伊勢原市の大山を描いた「相模国大隅群大山寺雨降神社真景」(図6)があります。大山が画面中央に大きく描かれ、平面図では伝わりにくい大山の全体像が、貞秀による構図の工夫によって、把握することができます。さらに、画中左端(図7)には「江之島」と「藤澤」が描かれ、大山周辺の地域もこの一枚の絵で楽しめるようになっていきます。

これまで土地の管理や支配が目的だった図は、江戸時代において風景・名所絵の要素が加わり、独自の形式が展開されました。そして幕末から明治時代を迎え、絵図も次第に変化していきました。

～江戸時代の絵図から近現代の地図へ～

やがて「絵図」から「地図」へと呼称が変化するのは、文部省が定めた近代的な学校制度に関する法令「学制」の中で、「地図」という言葉を使用するように示したことからです。学校教育を通して「地図」の呼称は急速に広まりました。

図8は、明治初期に描かれた「藤沢宿」です。「神奈川県」という表記から廃藩置県後に描かれたとされます。実際に測量した情報を元に「街道」は赤、「田」は黄色、「山林」は緑などと、その土地の用途ごとに色で分けられています。



図8「神奈川縣下第十八大区相州高座郡藤沢駅縮図」明治初期



図9 土地の詳細を色ごとに分けて表記している。

明治9年(1876)頃の神奈川県域には現在の町田市や八王子市、立川市などにあたる都市部や、自然豊かな奥多摩の山間部も含まれていました。明治26年(1893)、図にある北部の多摩郡が当時の東京府に移管され、現在の神奈川県域になりました。

近代化が進むと、縮尺、方位、経緯度などの情報が正確に示された地図が求められ、陸軍省に設けられた地図課と測量課や、内務省地理局を中心として地図作製が行われました。この地図作製には銅板画で活躍した玄々堂^{げんげんどう}などの民間業者が携わり、やがて日本全国で図10にみられるような近代的な地図が量産されるようになりました。

今回は、絵図・地図の歴史を藤沢市所蔵の作品とともに紹介しました。江戸時代に多様な目的で描かれた絵図が、近代国家へと歩むなかで地図へと移り変わっていく過程や、江戸時代に描かれた絵師たちの個性ある絵図に親しみ、楽しんでいただけるきっかけとなりましたら幸いです。



図10 岡田利正「神奈川縣管内之図」明治11年(1878)頃